

「つまづくことなく」

ヨハネの福音書 16:1~33

はじめに

イエシュアはパリサイ人や律法学者、祭司たちなどの当時のユダヤ人の指導者たちから受け入れられず、返って妬まれ、憎まれました。それは激しい怒りと殺意に満ちたものでした。そして彼らのその激しい怒りと殺意は、ついにはイエシュアを十字架にかけて殺すという結果を招くわけですが、それでも飽き足らないと言わんばかりに、やがてその矛先はイエシュアの弟子たち、イエシュアを信じ受け入れる者たちに向けられていくこととなります。聖書はこれを「迫害」と呼んでいます。この迫害によって弟子たちがつまづいてしまうことがないようにイエシュアは語られます。

16:1 これらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがつまづくことのないためです。

「つまづく」を意味するヘブル語はカーシャル(קָשַׁל)で、この言葉が聖書で最初に使われたのがレビ記 26:37 です。

【新改訳改訂第3版】

レビ記

26:14 もし、あなたがたがわたしに聞き従わず、これらの命令をすべて行わないなら、

26:15 また、わたしのおきてを拒み、あなたがた自身がわたしの定めを忌みきらって、わたしの命令をすべて行わず、わたしの契約を破るなら…

26:36 あなたがたのうちで生き残る者にも、彼らが敵の国にいる間、彼らの心の中におくびょうを送り込む。吹き散らされる木の葉の音にさえ彼らは追い立てられ、剣からのがれる者のように逃げ、追いかける者もいないのに倒れる。

26:37 追いかける者もいないのに、剣からのがれるように折り重なって、**つまずき倒れる**。あなたがたは敵の前に立つこともできない。

このようにカーシャルは本来、敵を恐れ、敵の前から逃げ出してしまうこと、戦う前から負けを認めてしまう状態を指し示しています。そしてそれは神様に聞き従わず、その命令を守らないことが原因となっていることが解ります。神様への不従順からくる恐れ、これが「つまづく」ことの意味だと考えられます。

1. 迫害の理由

16:2 人々はあなたがたを会堂から追放するでしょう。事実、あなたがたを殺す者がみな、そうすることで自分は神に奉仕しているのだと思う時が来ます。

16:3 彼らがこういうことを行うのは、父をもわたしをも知らないからです。

なぜユダヤ人の指導者たちはイエシュアを、そして弟子たちを迫害するのでしょうか。その理由がここに記されています。ユダヤ人たちは決して神様が憎くてイエシュアを迫害するのではないのです。むしろその逆です。彼らは神様を畏れ、神様を信じ、その命令を守り行うという熱心のゆえに迫害しているのです。それが神様への奉仕、神様に受け入れられ、喜ばれることだと思って迫害しているのです。かつてダビデ王によって建て上げられた神様を礼拝することを中心としたイスラエル王国は、彼の息子ソロモンが持ち込んだ大量の偶像によって国は南北二つに分裂し、北はアッシリア、南はバビロンによってそれぞれ滅ぼされてしまいました。生き残ったイスラエルの民は捕囚という憂き目の中で悔い改め、もう二度と偶像礼拝の罪を犯すまいと決意し、神様の律法を厳守するために命がけでこれに取り組み始めたのです。それはギリシャやこの当時のローマでさえも屈服させることはできないほど固いものでした。つまりこの迫害は、ユダヤ人の指導者たちは自分たちの信仰をかつてギリシャやローマから守ったように、皮肉なことにイエシュアからも守ろうとしたことによるものなのです。もちろんそれは大きな勘違い、誤解、的を外したものだのですが、まさに「父をもわたしをも知らない」という状況が生んだ残念な結果と言わざるをえません。だとするならば、御父である神様を知り、またイエシュアを知ることがいかに重要なことであるかが分かります。

2. 思い起こす

16:4 しかし、わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、その時が来れば、わたしがそれについて話したことを、あなたがたが思い出すためです。わたしが初めからこれらのことをあなたがたに話さなかったのは、わたしがあなたがたといっしょにいたからです。

イエシュアが弟子たちとともにおられた時は、迫害の矛先はすべてイエシュアに対してのみ向けられていました。しかし今やイエシュアは弟子たちから離れ、天の御父のもとに帰ろうとしておられるのです。以後その矛先はすべて弟子たちに向けられるのです。その事実をイエシュアは弟子たちに前もって話す必要がありました。しかしたとえイエシュアが多くの真理を弟子たちに対して語っても、弟子たちがそれを覚え、また思い出すことがなければ意味がありません。イエシュアの御言葉を、弟子たちに「思い出さ」せてくださる存在がいます。それは真理の御霊、聖霊です。イエシュアはこの聖霊の働きについてこのように述べておられます。

【新改訳改訂第3版】

ヨハネ

14:25 このことをわたしは、あなたがたといっしょにいる間に、あなたがたに話しました。

14:26 しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。

このように聖霊の働きとはイエシュアの話された、すなわちイエシュアを遣わされた御父の御言葉を聞いた者たちにもう一度、いや何度でも「思い起こさせ」るものであると考えられます。ここで使われている「思い出す、思い起こす」という意味のヘブル語はזָכַר(זָכַר)と言い、これが聖書で最初に使われている箇所が創世記8:1です。

【新改訳改訂第3版】

創世記 8:1 神は、ノアと、箱舟の中に彼といっしょにいたすべての獣や、すべての家畜とを心に留めておられた。それで、神が地の上に風を吹き過ぎさせると、水は引き始めた。

これは大洪水が世界を滅ぼした「ノアの箱舟」の出来事ですが、ここで箱舟に乗っていた全てのものに神様は「心に留めておられた」という部分が本来のザーハルです。ここで神様はザーハル「心に留めておられた」ゆえに「地の上に風を吹き過ぎさせた」とありますが、この「風」と訳されているのがルーアハ(רוּחַ)で、これは「聖霊」という意味をも持った言葉です。つまりザーハル「思い起こす、心に留める」こととルーアハ「風、聖霊」は密接な関係を持っているとすることができます。このルーアハ、聖霊が遣わされること、そしてその働きについてのイエシュアのメッセージが以下に続きます。

3. 証し

16:5 しかし今わたしは、わたしを遣わした方のもとに行こうとしています。しかし、あなたがたのうちには、ひとりとして、どこに行くのですかと尋ねる者がありません。

「どこに行くのですかと尋ねる者がありません。」と語っておられますが、最後の晩餐の席で弟子のペテロとトマスがイエシュアに対してこのように言っていました。

【新改訳改訂第3版】

ヨハネ

13:36 シモン・ペテロがイエスに言った。「主よ、どこにおいでになるのですか。」イエスは答えられた。「わたしが行く所に、あなたは今はついて来ることができません。しかし後にはついて来ます。」

14:5 トマスはイエスに言った。「主よ、どこへいらっしゃるのか、私たちにはわかりません。どうして、その道が私たちにわかりましょう。」

ペテロもトマスもイエシュアに「どこに行くのですか」と尋ねています。しかしこの二人の心にあったのは自分たちのもとから離れて行くと言われたイエシュアの言葉に対する「離れたくない、行かせたくない」という反発心、反抗心、つまり神様のご計画を否定する思いから出た言葉であり、彼らはイエシュアが去って行くことによってどのようなことが起こるのかについての関心、理解、受け入れる心がまだなく、ただイエシュアが去って行くという目の前の事実に対する悲しみから出た「どこに行くのですか」という質問であったことをイエシュアは見抜いておられました。

16:6 かえって、わたしがこれらのことをあなたがたに話したために、あなたがたの心は悲しみでいっぱいになっています。

「悲しみ」とは自分の思いに反すること、また思い通り、願い通りにいかない時に生じる感情であり、それは怒り、悔しさと同義と言えます。神様のご計画を理解していなかった弟子たちの心に「なぜ去っていかれるのだ！なぜついて行くことができないのだ！」という思いが悲しみ、怒りとなってあふれていました。そんな弟

子たちにイエシュアは真実を語られます。

16:7 しかし、わたしは真実を言います。わたしが去って行くことは、あなたがたにとって益なのです。それは、もしわたしが去って行かなければ、助け主があなたがたのところに来ないからです。しかし、もし行けば、わたしは助け主をあなたがたのところ遣わします。

「助け主」である聖霊が遣わされるためには、イエシュアは去って行かなければならないのです。しかしなぜ聖霊が遣わされるからと言って、イエシュアが去って行かなければならないのでしょうか。その理由がこの後に説明されています。

16:8 その方が来ると、罪について、義について、さばきについて、世にその誤りを認めさせます。私たちの助け主である聖霊は、罪とは何か、義とは何か、そしてさばきについて、それらの持つ意味を明らかにして下さる方であることが示されています。

16:9 罪についてというのは、彼らがわたしを信じないからです。罪とはイエシュアを受け入れず、信じないことです。その結果としてイエシュアは十字架にかけられ、殺されます。ですからイエシュアが殺される、つまり去って行かなければ、世にその罪を認めさせることができないのです。人が殺されなければ、誰も殺人の罪に問われることがないのと同じ理屈です。

16:10 また、義についてとは、わたしが父のもとに行き、あなたがたがもはやわたしを見なくなるからです。義とは「父のもとに行く」こと、すなわち御父に受け入れられるということです。イエシュアが義なる御方であることを証明するためには、天の御父のもとに上られ、この地上を去って行かなければならないのです。

16:11 さばきについてとは、この世を支配する者がさばかれたからです。「この世の支配者」とは、究極的にはサタンを指し示すと考えられます。イエシュアが十字架にかかれ、死に至るまで神様への忠実、従順を貫き通すことで、神様のご計画の最後の切り札であったイエシュアを失敗させようとしたサタンの企みが失敗に終わったことが確定し、サタンの敗北が決定的なものとなるのです。イエシュアが御父のもとに義と認められて受け入れられれば、もはやサタンにはどうすることもできません。

これらの理由から、聖霊が遣わされ、またそのためにイエシュアは去って行かなければならないのだと考えられます。つまり御子であるイエシュアが御父である神様を証しするために遣わされたように、聖霊は、イエシュアを証しするために遣わされる御方だと言えます。イエシュアを信じ受け入れることが御父を受け入れることと同じであるように、聖霊を受け入れることはイエシュアを受け入れることと同義なのです。

4. やがて起ころうとしていること

またイエシュアはこの聖霊について、さらにこのように述べておられます。

16:12 わたしには、あなたがたに話すことがまだたくさんありますが、今あなたがたはそれに耐える力がありません。

16:13 しかし、その方、すなわち真理の御霊が来ると、あなたがたをすべての真理に導き入れます。御霊は自分から語るのではなく、聞くままを話し、また、やがて起ころうとしていることをあなたがたに示すからです。

聖霊は「やがて起ころうとしていることをあなたがたに示す」御方であることが示されています。その「やがて起ころうとしていること」とは何でしょうか。それは決してあなたが何を食べるとか、どこに住むとか、どのような生き方、働きをするかということについてはありません。なぜならイエシュアはそれを受け取る弟子たちに「それに耐える力がない」と言われるほどのものだからです。これが人のことではなく、人の思いをはるかに超えた存在である神様に関すること、そのご計画に関するものであることは言うまでもありません。

16:14 御霊はわたしの栄光を現します。わたしのものを受けて、あなたがたに知らせるからです。

16:15 父が持つておられるものはみな、わたしのものです。ですからわたしは、御霊がわたしのものを受けて、あなたがたに知らせると言ったのです。

イエシュアはご自分が御父と密接な関係をもつておられるのと同様に、御霊、聖霊ともそうであると語っておられます。つまり御父と御子と御霊はまるで一つでもあるかのごとく密接に、相互に繋がっておられるのです。これが今日「三位一体の神」と呼ばれる所以です。

5. たとえ理解されなくても

16:16 しばらくするとあなたがたは、もはやわたしを見なくなります。しかし、またしばらくするとわたしを見ます。」

16:17 そこで、弟子たちのうちのある者は互いに言った。『しばらくするとあなたがたは、わたしを見なくなる。しかし、またしばらくするとわたしを見る』、また『わたしは父のもとに行くからだ』と主が言われるのは、どういうことなのだろう。」

16:18 そこで、彼らは「しばらくすると、と主が言われるのは何のことだろうか。私たちには主の言われることがわからない」と言った。

16:19 イエスは、彼らが質問したがっていることを知って、彼らに言われた。「『しばらくするとあなたがたは、わたしを見なくなる。しかし、またしばらくするとわたしを見る』とわたしが言ったことについて、互いに論じ合っているのですか。

これはイエシュアが十字架にかかれ、死んで葬られ、三日目によみがえり、天に上られ、しかし終わりの日に再び戻って来られること、つまり「やがて起ころうとしていること」が語られています。しかしイエシュアが言われたように、この時の弟子たちには「それに耐える力」がない、つまり理解できないのです。なぜなら聖霊がまだ遣わされていないからです。しかし耐える力がないからと言って、イエシュアはそれについて全く話さないわけにはいかないのです。なぜなら聖霊は、イエシュアの語られた御言葉を「思い起こさせる、思い出させる」御方であるからです。イエシュアが語られたことについて、それを明らかにし、理解させる御方なのです。つまりイエシュアが語られたことと食い違うようなことや、全く関係のないようなことを聖霊が語るということはあり得ません。ですからこのように、聞く者が理解できなくても受け入れられなくても、後に来られる聖霊のために、語るべきことを語らないわけにはいかなかったのです。そんないわゆる「空気を読まない」イエシュアのメッセージが続きます。

16:20 まことに、まことに、あなたがたに告げます。あなたがたは泣き、嘆き悲しむが、世は喜ぶのです。あなたがたは悲しむが、しかし、あなたがたの悲しみは喜びに変わります。

16:21 女が子を産むときには、その時が来たので苦しみます。しかし、子を産んでしまうと、ひとりの人が世に生まれた喜びのために、もはやその激しい苦痛を忘れてしまいます。

16:22 あなたがたにも、今は悲しみがあるが、わたしはもう一度あなたがたに会います。そうすれば、あなたがたの心は喜びに満たされます。そして、その喜びをあなたがたから奪い去る者はありません。

イエシュアを信じない、受け入れない人々は、イエシュアが十字架にかかれて死ぬ時に喜びます。今日でもユダヤ教徒の中には「イエシュアを十字架にかけた私の先祖を誇りに思う」と叫び、イエシュアの死を喜ぶ者がいます。一方イエシュアを信じる人々、クリスチャンは十字架の受難を思い起こす時、それが自分の罪の身代わりであったことを思う時、胸が締め付けられるような思いになります。数年前にイエシュアの十字架の受難を描いた「パッション」という映画が世界中で上映されましたが、それを見た多くのクリスチャンが涙しました。この当時、実際にそれを目の当たりにした弟子たちの悲しみ、衝撃はどれほどであったでしょう。

しかしイエシュアは三日目によみがえられます。弟子たちの悲しみは喜びに変わりました。しかしそれはあくまで「型」に過ぎません。本当の喜びは、天に上られたイエシュアが再び戻って来られる時、再臨される時に表されます。その喜びはイエシュアを信じ受け入れたすべての者が味わうことのできる喜びです。もはやその喜びが奪い去られることはありません。イエシュアはこの永遠の喜びの真理を、妊婦の出産のたとえを交えながら、三度も繰り返して語っておられます。それだけ重要な真理だということです。

6. 求める

16:23 その日には、あなたがたはもはや、わたしに何も尋ねません。まことに、まことに、あなたがたに告げます。あなたがたが父に求めることは何でも、父は、わたしの名によってそれをあなたがたにお与えになります。

16:24 あなたがたは今まで、何もわたしの名によって求めたことはありません。求めなさい。そうすれば受けるのです。それはあなたがたの喜びが満ち満ちたものとなるためです。

ここで「求める」と訳されているヘブル語はバーカシュ(בקש)と言い、これが聖書で最初に使われている箇所は創世記 31:39 です。

【新改訳改訂3】

創世記 31:39 野獣に裂かれたものは、あなたのもとへ持って行かないで、私が罪を負いました。あなたは私に責任を負わせました。昼盗まれたものにも、夜盗まれたものにも。

ここで「責任を負う」と訳されているのが本来のバーカシュです。これはヤコブが義父のラバンに対して語ったものですが、ヤコブはラバンのもとで彼の家畜を飼う責任を任されていました。そこで家畜が獣に殺されたり、盗まれたりした場合、ラバンはヤコブにそれを弁償するよう「求めて」いました。つまりバーカシュとは、本来持っていたもので、奪われたもの、失われたものに対して、その代価、償い、弁償を「求める」という意

味があり、失ったものを取り戻す、回復されるという意味があると考えられます。私たち人間が本来持っているもので、奪われてしまったもの、失ってしまったものとは何でしょう。それは永遠のいのちではないでしょうか。かつて人は神様とともに永遠に生きる存在として創造されました。そしてその場所、住まいとしてエデンの園が与えられました。しかし最初の人であったアダムが罪を犯したためにそれらはすべて失われてしまったのです。ですから私たちがバーカシュ、求めなければならないもの、それは永遠のいのちであり、永遠の住まいであるエデンの園なのです。創世記 2:15 にこのように記されています。

【新改訳改訂第3版】

創世記

2:15 神である主は人を取り、エデンの園に置き、そこを耕させ、またそこを守らせた。

エデンの園に住み、そこを耕し、守る。これこそが本来私たち人のあるべき姿であり、失われてしまったものであり、その弁償を「求める」べきものなのです。そしてこれよりももっと重要な、私たち人から失われ、求めなければならないものがあります。それが次に示されています。

16:25 これらのことを、わたしはあなたがたにたとえで話しました。もはやたとえでは話さないで、父についてはっきりと告げる時が来ます。

16:26 その日には、あなたがたはわたしの名によって求めるのです。わたしはあなたがたに代わって父に願ってあげようとは言いません。

16:27 それはあなたがたがわたしを愛し、また、わたしを神から出て来た者と信じたので、父ご自身があなたがたを愛しておられるからです。

私たち人から失われ、求めなければならないもの、それは「御父である神様との直接的な関係」つまり「神様との交わり」の回復です。それは愛の関係であり、一切の仲介を必要としない、まさに顔と顔を合わせる親密な関係です。これこそが人が神様に似せて造られた理由だと考えられます。

【新改訳改訂3】

創世記 1:26 神は仰せられた。「さあ人を造ろう。われわれのかたちとして、われわれに似せて。彼らが、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配するように。」

ですから私たちが求めるべきものは「神様の似姿となる」ことであると言えます。それが神様がお造りになられた私たち人の本来あるべき姿だからです。

7. 信仰

16:28 わたしは父から出て、世に来ました。もう一度、わたしは世を去って父のみもとに行きます。」

16:29 弟子たちは言った。「ああ、今あなたははっきりとお話しになって、何一つたとえ話はなさいません。」

16:30 いま私たちは、あなたがいつさいのことをご存じで、だれもあなたにお尋ねする必要がないことがわかりました。これで、私たちはあなたが神から来られたことを信じます。」

この時点ではまだ聖霊の助けがありませんので、弟子たちはイエシュアの語られたことをほとんど理解できなかったでしょう。しかし彼らはその御言葉を信じました。ですからもはや自分たちから去って行こうとするイエシュアに対して反発するような発言をする者はいませんでした。この時の弟子たちの姿は私たちクリスチャンの型です。なぜなら私たちはイエシュアの御言葉のすべてを理解したから信じたのではなく、ここで弟子たちが告白したように、ただ「あなたが神から来られたこと」神様から遣わされた御子であること、イエシュアは神であることを信じてクリスチャンになったからです。しかし聖霊の助けを得ない信仰がいかに弱いものであるかが次に示されています。

16:31 イエスは彼らに答えられた。「あなたがたは今、信じているのですか。」

16:32 見なさい。あなたがたが散らされて、それぞれ自分の家に帰り、わたしをひとり残す時が来ます。いや、すでに来ています。しかし、わたしはひとりではありません。父がわたしと一緒におられるからです。イエシュアがユダヤ人の指導者たちによって捕らえられるその時、弟子たちの方がイエシュアから離れ去ってしまうことが語られています。聖霊の助けを得ない信仰、すなわちイエシュアの御言葉を思い起こすことも、理解することもない信仰です。そのような信仰は、すぐに平安を失い、恐れに飲み込まれてしまいます。

16:33 わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがわたしにあって平安を持つためです。あなたがたは、世にあっては患難があります。しかし、勇敢でありなさい。わたしはすでに世に勝ったのです。」

「わたしがこれらのことを…話した」つまりイエシュアが話された御言葉は、私たちの信仰を恐れから守り、平安を与えます。ですから私たちは聖書を読み、その意味を理解することを求めましょう。助け主である聖霊は、そこに働いてくださる御方だからです。ここに記されている「勇敢でありなさい。」という御言葉を思い起こさずして、どうして勇敢であることができるでしょう。そして「わたしはすでに世に勝ったのです。」という御言葉の意味を理解することで更にその勇敢さがかづけられるのです。だから私たちは信仰を守るために、聖霊の助けを得るために、聖書を読み、学ばなければならないのです。今日も皆さんの信仰がつまづくことなく、御言葉を通して働かれる聖霊の助けによって守られ、勇敢でありますように。